資料３

バリアフリーの街づくり取組み推進状況モニタリング現地確認結果報告書

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 対象事例名 | | 多感覚で楽しむアート展「美術館まで（から）つづく道」 |
| 対象団体名 | | 茅ケ崎市美術館 |
| 現地確認日時 | | 2022年　8月10日（水）15：25～18：30 |
| モニタリング  グループ | | 〔リーダー名〕大原一興 |
| 〔メンバー名〕大部さつき、関根千佳、吉富多美 |
| 検　　証　　項　　目 | | |
| 先進性 | ・美術館での取り組みは先進的で、県内の他の美術館、博物館では類例がない。ただし、他館での展開や同館での継続など、今後の展開に乏しい。  ・美術館ならではの取り組みであるが、フィールドワークの組み立て方は、バリアフリーの街づくりの一つの方法として、参考になると考えられる。街づくり全体とみると、より行政も巻込んだチームづくりの可能性を見たい。  ・当事者と共に企画を作っていくという点では独創的かつ先進的な企画展である。  ・障害者やマイノリティと位置づけられる人たちとのフィールドワークが紡ぎだした作品に未来を感じた。誰もが感覚特性者であり、その多感覚が共鳴して生まれたアートの世界はインクルーシブな社会を象徴しているように思えた。  ・美術館自体は市の管轄でUDは一般的な建物である。 | |
| 共感性 | ・展示に触れるだけですぐに理解できるとは言えず、学芸員による解説があると理解は大きく深まる。  ・当事者と共感しながら作っていっており、そのインクルーシブな姿勢は評価できる。  ・これまでフィールドワークの中で、担当者が気付きを大切に取り組んでこられたことが、この企画をけん引してきたと考えられる。今後来場者の方が、説明を受けないで、また別の展示においても、どこまで、何を気付くのかが課題ではないかと考えられる。  ・目を閉じて音と香りのアートを想像し、触れることで質感を楽しみ、子どもや車イスユーザーの位置で作品を鑑賞する。作品はもちろんのこと、工夫された展示方法に新たな気づきを促される人は多いように思った。  ・美術館全体では、ダイバーシティ研修を職員全員が受けており、企画展を機会に、関係者の障害への共感力は高い。 | |
| 当事者の視点・当事者参加と県民ニーズの反映度 | ・参加した当事者、アーティストは確実に満足のいく参加がなされているが、展示観覧者の参加や一般的なバリアフリーニーズに答えているかは不明。  ・当事者数名が企画に参加しているが、多様な県民のニーズがどこまで反映されているかは明確にはわからない。  ・現在、地域の特別支援学校とのつながりを持っていらっしゃるとうかがい、新たな気づきと挑戦に向かっていると理解した。公立の美術館だからできる取り組みを期待したい。県立の学校だけでなく市内の小中学校の特別支援級の場にも美術館の存在がより認識されるとよい。  ・当事者からの「迷い道を楽しんだ」「楽しい体験がバリアそのものを融解させた」という声に学芸員は勇気づけられたという。バリアフリーが「困ったとしても誰かが手伝ってくれるという信頼感」(当事者の声)を社会に育むことだとすれば、アート展の楽しさは貴重な場であるといえる。  ・美術館全体では、子供連れや聴覚障害者などへの配慮は一応あると思われるが、高齢者や視覚障害者に関しては今一つかもしれない。 | |
| 波及効果 | ・他館への広がりや、他部署との関連・協働が深まったとは言えない。アートイベントはイベントとして終わり、実際のバリアフリー化には反映されていない（狭い道は狭いまま）。さらなるイベントの開催と今後に期待したい。  ・美術館として様々な人の動きをどのようにつなげていかれるのか、興味深く見ていきたいと思います。  ・案内板ができたとのお話でした。少しずつ、市全体で、つながっていくことを期待したいです。  ・企画展で行われた筆談ボードがそれぞれの展示場でも使われており、レガシーとなっていることがわかった。  ・視覚、触覚、聴覚、嗅覚などを感じる作品「うつしおみ」の再展示や、養護学校中等部の生徒たちとのアートを通しての交流もあり、波及効果は今後も期待できる。  ・美術館全体として、障害のある方への接し方などが職員内で共有された。 | |
| その他 | ・とても良い取り組みであるが、常設できないこと、繰り返しこのテーマに関連する取り組みがおこなわれていないこと、経験が他館と共有できていないことが、もったいない限りです。  ・この企画そのものは大変秀逸であるが、企画が終了した後に、美術館への道のわかりにくさが解消されるわけではないので、新規にやってくる人への配慮が薄いのが残念である。せっかくの良い企画を継承するためにも、徳島県立近代美術館のように、ユニバーサルミュージアムとして、同様のUDな企画展を、毎年何らかの形で継続することが望まれる。[https://art.bunmori.tokushima.jp/tokuni/](https://art.bunmori.tokushima.jp/tokuni/特になし) | |
| 所　　　見 | ・企画や狙い、インクルーシブな作り方は良いのだが、例えばパンフレットは、全くアクセシブルではない。点字を追加したのはわかるが、元々の印刷物自体がまったくUDでない。コントラストやカラーUDへの配慮がなく、ポイントも小さいのでほとんど読めない。またそれの上に点字が付加されたことで、視認性がますます低くなっている。点字を読める視覚障害者は約3万人であるが、高齢になって見えなくなる、また見えにくくなる人が2000万人以上いることを考えると、今後もUDに対する勉強会を続け、コストのかからないUDな方法を検討して頂きたい。これは関連のポスターやチラシに関しても同様である。このちらしは夕方以降全く読めない人もいる。柄の上の文字も問題である。JIS規格的にも禁止事項が満載のパンフになっているのが、大変残念である。情報をUDに出すということの意味を、正確に理解して頂けると幸いである。  ・美術館までの道は森の中にあり、表示も少なく整備もされておらず、車イスユーザーの方や視覚に障害がある方の不便さが気になった。フィールドワークでの様子を伺い、当事者の求めているバリアフリーに改めて気づかされた。  ・美術館のハード面で感じたことは、トイレの使用中かどうかが奥まで行かなければ、わからないのではっきりすると助かります。コミュニケーション支援のためのホワイトボードが、せっかく用意してあるので、「筆談によりご案内いたします」と明確に記してあると、職員さんと話しやすくなると感じました。  ・美術館建築についてのコメントとして追記する。公共施設に求められるアクセシビリティは、建物以外には、①その施設へのアクセス方法を来館者に対し事前にかつその場で提示する。②施設に関する情報をサイトなどでアクセシブルに提示する。という二点が重要である。　まず①に関しては、茅ヶ崎市美術館は、駅からのアクセスが非常に難しく、案内に関してはもう少し工夫が必要と思われえる。駅からの案内を明示した2018年10月のNewsは大変良くできているのに、これが美術館のアクセス情報に乗っていないのが大変惜しい。　https://www.chigasaki-museum.jp/news/2959/　　初めての来館者には高砂緑地と松籟庵の関係すらわからないので、入ってから非常に不安になる。Google Mapでたどり着けないのは九州国立博物館などで経験済みなので驚かないが(ここは現地に案内板があるので苦しまない)、せっかくUDなマップがあるのだから、サイト内で情報提示をしてほしい。なお可能であれば、松籟庵内の道すがら、小さいものでいいから「美術館はこちら」という手作りの看板があると、来館者の苦労が軽減されると思われる。サインに関しても、例えばトイレの中にある様式の案内は文字が小さく見つけにくい。個室が空いているかどうかがほとんどわからないので、鍵と連動した○×の突出型表示を出すといった工夫が望まれる。また掃除道具入れは、それを示す札をドアの表に貼るだけで良い。これらの改善には、市の許可は要らないはずである。　次に②のサイトのアクセシビリティだが、大変残念な結果になった。アクセシビリティチェッカーで評価すると、トップページだけで1001個以上のエラーが検出され、-4712点という前代未聞の数値となった。実は道のイベントやMULPAのサイトもあまりUDではないので、関係者の間でもこの点における共通理解は薄いと思われる。海外チェッカーでも同様で、訴訟されるリスクが高いので早急に改善をという指示が出された。結論として、2019年の企画はインクルーシブな作成過程としても、大変素晴らしかった。しかし美術館のアクセシビリティという観点からは、国内で傑出しているとは言い難い。建物が市の管轄で改良できないとしても、情報提示やその方法に関しては、まだまだ改善が可能であると思われる。 | |